2022/2/7
（オマケの「日本語教室」妙）書庫版

一時
「ビミョー」
「ミョー！！」
「ミョーな奴」
という言い方が流行った事がありました。
この場合の「妙」は英語でいうと処の
Strange「変な」とか curious「奇妙な」といった意味あいで使われておりました。
一方同じ「妙」という漢字で
「絶妙」「妙技」や
訓読みですが
「妙なる調べ」
といった使い方もあります。
是等はむしろかなりの誉め言葉で大抵は「技芸」分野の行為に対して使われている気がします。歌舞音曲（かぶおんぎょく）界においてとでも申しましょうか。
是又英語で申せば
「絶妙」が perfect fitting
「妙技」が excellent performance(or play)
「妙なる調べ」が graceful melody(or harmony or music)
でいずれも我々が耳慣れた単語で申しますと wonderful「素晴らしい」といった意味合いに使われております。
ところで話は変わりますがこの「妙」という漢字。
「女」が「少ない」という構成になっております。
そして更にこの作業を進めると「女」という字は「く」「ノ」「一」という構成。

一方女に対する「男」という漢字は「田んぼ」の「力」という構成。
「男」という字の成り立ちに関しては漢字ができた頃、男として認められるには「田んぼを耕す力」「田んぼで育った稲を収穫して売る力」が重要だったので「男」即ち「田んぼの力」という字になった由来は知っておりました。要するに経済力。
では「女」という字の成り立ちはどうでしょう？
是は自分が最近聞いた処では
「く」と「ノ」と「一」という構成で女性の「たおやかでしなやかな」動きを表し、そこから象形したのだと。
つまり「男」の文字が経済力由来に対して「女」の文字が「動作」「容態」「容姿」由来という事の様です。
さらに絞り込めば「男」の字が「経済」や「力」を「女」の字が「美」や「芸」「文化」を表している様にも見えます。
さて寄り道はこれ位にして本題に戻りましょう。
曰く
「何故「女」が「少ない」と変なのか？」
と
「何故「女」が「少ない」事が素晴らしい事なのか？」
にです。
そこで又考えてみたのですが
本来「女」即ち「美」や「芸」「文化」があって然るべきなのにそれがない（経済と力ばかりの）世界のあり方は「変（片手落ち、balance の欠如）である」という事なのではなかろうかと。
では「女」が「少ない」事が何故「素晴らしい」事なのか？
第一回目の取りつきでは何となく「女性蔑視」や「男尊女卑」とも受け取れる解釈になってしまいます。
幾ら古代の事とはいえそこまで酷くはなかったと思うのです。何故なら
「太古、女性は太陽であった」
という言い方もあるからです。
で、更にあれこれ考えてみたのですが、以下のような解釈が成り立ちそうな事に気づきました。
即ち
「女性が持つ「美」や「芸」「文化」にわざわざご登場願わなくても、本家本元の代用として十分に成り立つ素晴らしいもの」
それが「妙技」「妙なる調べ」の際の「妙」の由来なのだと。
因みに「絶妙」は「本家本元が全くいなくても（絶えても）成り立つ程見事な美芸」となるのでは？と。